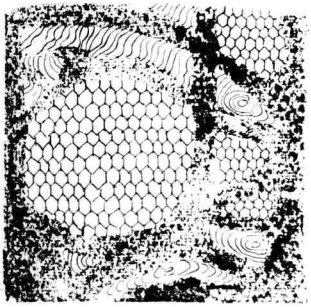
日本ミステリ・シリーズ

10

y Series 10

風は故郷に向う

三好　徹



早川書房

著者略歴

昭和6年1月7日東京に生る　横浜高商卒
現住所　神奈川県横浜市中区福富町38
主著書
「光と影」（光文社刊）
「海の沈黙」（三一書房刊）
「乾いた季節」（河出書房刊）

印
検　止
廃

第十回配本　定価三四〇円

風は故郷に向う
日本ミステリ・シリーズ　第八巻

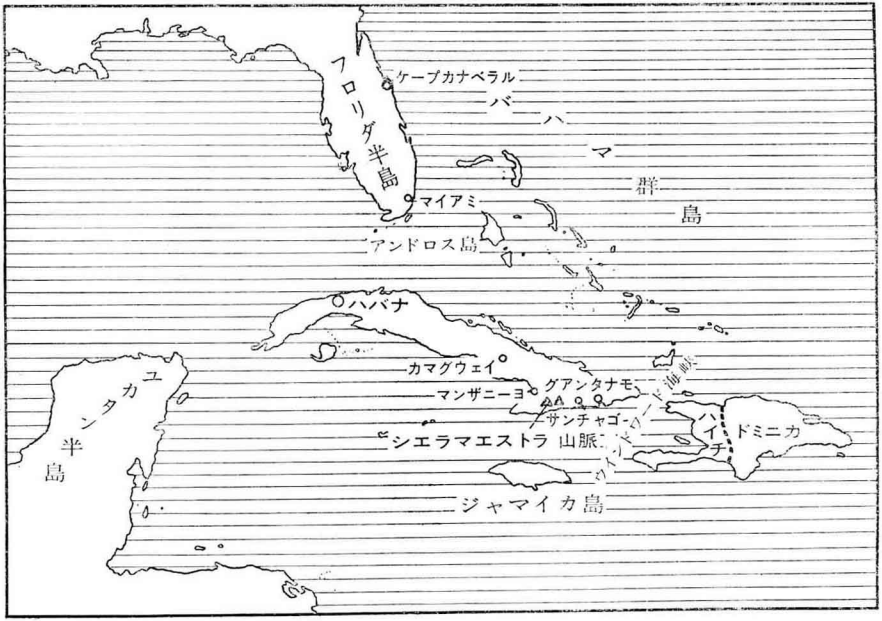
昭和三八年四月一〇日　印刷
昭和三八年四月一五日　発行

著者　三好　徹
発行者　早川　清
印刷者　堀内文治郎

発行所　早川書房
東京都千代田区神田多町二〜二
電話　東京（291）0250　（代表）三五二〇・一六八〇・三八四〇
三五二〇〜八（編集）

用紙・四国製紙KK／クロース・日本クロースKK／印刷・KK堀内印刷／製本・堅省堂

風は故郷に向う



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

目次

第一章　空港にて……五
第二章　緊急電報……二一
第三章　詭計の網……四九
第四章　動乱の街……八三
第五章　変転……一一三
第六章　昏迷の底に……一五三
第七章　暗い道……一八六
第八章　風は故郷に向う……二一九
あとがき……二六六

箱・カット　小松久子

涙と血とともに民衆は生まれる

——ホセ・マルティ

第一章　空港にて

1

空港のロビイは、床をみがきあげるワックスの香りと冷房とが入りまじった空気で、鼻孔がふさがれるような感じであった。

この空気はなんとなくなじめないな、と私は思った。ここには、日本の匂いがしないで、混血の、それもアメリカだかフランスだか生国のわからぬ混血の匂いがする。しかし、そこにいる十数人の人間のなかで、そんなことを考えているのは、私ひとりだったようである。妹の紀子は、顔を上気させ、彼女をとらえている昂奮に身をゆだねていた。その瞳は、窓からさしこんでくる太陽の光をうけて、つややかに輝いている。結婚したばかりの、そして、これから新婚旅行へ飛び立とうとしている紀子にしてみれば、冷静でいろ、というほうが無理な注文だったろう。私は、ふと、幸福は日光に似ている、という詩の一節を想い出していた。

紀子は、友人たちにとりかこまれている。

「ハズが操縦してくれる飛行機にのって、八丈島へ新婚旅行に行けるなんて、まったく、うらやましいなあ」
かなり過剰な身振りとともに、羨望の表情をつくっているのは、紀子の友人の市川はるみである。
「紀子、ハズにしがみついたりして、操縦のカンを狂わしたりしてはダメよ。墜落したら大変だからね」
別の友人にひやかされて、紀子は身をくねらせた。
私は視線を紀子から黒崎へと移した。頭髪をポマードでかためたビル・黒崎は、血色の良い横顔をみせて、かれの友人たちに囲まれていた。
ビル・黒崎。名前のとおり二世だった。私の妹の夫になる男として、私は、必ずしもかれを好いていない。兄妹二人だけの私たちの間に、三カ月前に不意に彗星のように割りこんできたこの男の前歴がどんなものかは、私はあまりよく知らない。ハワイに両親がいて、農場を経営している、と紀子に語ったそうだが、農場にもいろいろある。百エーカーのもあれば一エーカーのもある。どちらも農場であることには変わりない。
最初に紀子に紹介されたとき、私は、かれが飛行機乗りであると知って、多少の好意というか親身なものを感じた。私自身、十数年前までは海軍航空隊の一員だったから、飛行機乗りには、相手がだれであろうと、同志的な紐帯感を覚えるのである。黒崎も、その例外ではなかった。だが、いま黒崎は私の手から紀子を奪い去って行こうとしている。私は、なぜかのどの奥を熱いも

ので灼かれるのだった。
やがて、出発の時間がきた。黒崎は同僚から操縦士用のヘルメットをうけとると、周囲のものと握手しはじめた。
紀子もそれにならって、彼女の友人たちと握手をかわしてから、小走りに走って、少し離れたところに立っていた私のもとへやってきた。
「兄さん、じゃ、行ってきます」
「ああ、身体に気をつけるんだよ」
「ええ」と紀子はうなずいてから、いつも私に見せる、故意に眼をみはる独特の表情をつくって答えた。「兄さんのほうこそ、身体に気をつけてね。キューバって、暑いところなんでしょう？生ま水をのんでおなかをこわさないようにしてね」
母親みたいな紀子の言い方に、私は思わず苦笑した。
「大丈夫だ。年末には帰国できる。クリスマスはこちらで迎えるつもりだからな。お前を送りっぱなしなのは気がかりだ。せめて八丈島から帰ってくるのを待って出発したかったんだが、会社の都合もあるし、仕方がない」
「わたしは大丈夫。じゃ、行って参ります」
紀子は、二、三度まばたきしてみせると、ゲイトの方へ歩きはじめた。
紀子と黒崎は手に花束をかかえてゲイトの外へ出た。とつぜん、万歳と叫ぶものがあった。黒崎はびっくりしたように立ちどまって声の方を見たが、すぐさま、紀子の手をとって、待機場所

にある小型飛行機の方へ歩き出した。

飛行機はビーチ・クラフトであった。機体は赤色に塗られている。その赤い翼が私の眼に泌みた。

昇降口の下で立ちどまった紀子は、私たちの方をふりかえって手を振った。送迎デッキに出ていた私も、それに応えて、手を振ってみせた。それが紀子に、私とわかるかどうかは疑問だが、ともかく、私は手を振らずにはいられなかった。

紀子と黒崎を吸いこんだビーチ・クラフトは、プロペラを始動させ、そのままズルズルと滑走路へ出て行った。窓ぎわに顔を捺しつけていた紀子が、ふたたび手を振ったような気がする。私も、ふたたび手を振り、心のなかで、紀子、元気でな、と叫んだ。

ビーチ・クラフトは滑走路の端でしばらく待機したのち、向きをかえると海にむかって滑走しはじめた。すぐに機体は空に浮かび、急上昇すると、そのまま、南へ機首を向けた。反転して、送迎デッキの上へ舞い戻ってくるものと期待していた私は、このとき、黒崎の手に紀子を奪いとられたという実感を、はっきりと感じとった。紀子は、清川紀子ではなく黒崎紀子となってしまったのだ、と私は自分に言いきかせた。

飛行機はどんどん遠くなり、やがて、碧空の中の豆粒のような一点となった。私は、自分の胸の内がわに、黒い穴がぽっかりと口をあけているのを感じながら、送迎デッキを降りた。汗がじっとりと私の全身を濡らしている。その汗は、私の内がわからしぼり出された苦汁であったかもしれない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

2

空港ビルを出たところに、市川はるみが立っていた。もえぎ色のスーツが落ち着いた雰囲気をあたりに漂わせている。彼女はサングラスをゆびにからませてぶらぶら左右に振りながら、私を認めると眼顔で合図を送ってよこした。

「紀子さん、とうとう行ってしまいましたわね」

「ええ」と私はつとめて明かるい声で答えた。

「兄貴としての感慨はいかが」

「別にない、といえば嘘になる。といって、これがあたりまえなんだし、そう、深刻がることもないでしょう。ともかく、これで紀子も一人前になったわけだから」

「あら、そうすると、私はまだ一人前じゃないということになりますね」

彼女は頬に手を当てて笑った。つりこまれて、私も笑った。

「そういうつもりじゃないが、しかし、あなたにはご両親が揃っていらっしゃることだし、紀子にはそれがいなかった。それに、私は日本を離れなければならない。あなたには、これからも紀子の面倒をみて下さるよう、お願いしますよ」

彼女は私とならんで歩き、中型の乗用車のドアをあけた。

「お送りしますわ」
「生命保険に入っていないから、よろしく頼みますよ」
彼女は私を睨むまねをしてみせた。あまり上手ではないジョークだった。私の心は少しも軽くならず、紀子をのせた飛行機が蒼い空に吸いこまれた時から生じた空白を埋める力をもたなかった。
人々は、結婚式をめでたいものだ、と称している。それがいわば世間の常識というものだろう。だが、常識は必ずしも正しくはない。正しくない、といって悪ければ、常識は最大公約数であるために、個々にはあてはまらないという逆説も成り立つ。紀子の黒崎との結婚がめでたいかどうか、私の立場からは、肯定できなかった。
だが、いまさら、そんなことを市川はるみに言ってみたところで無意味だ。私は黙って窓外に流れ去る国道わきの民家や人々を眺めた。
「紀子さんからうかがったのですけれど、近々、キューバへいらっしゃるのだそうですね？」と市川はるみは前方に視線を据えたままたずねた。
「ええ、あしたの夜の飛行機で出発する予定です」
「どうして、キューバへなんかいらっしゃるんですの？」
どうして？　ときかれても返答に困る。私がつとめている極東自動車ＫＫの社命によって、としか返事のしようがない。私もすき好んでキューバへ行きたかったわけでもないのだ。パリとかローマとかなら、だれもが喜んで行くだろう。だが、極東自動車のジープは、ヨーロッパ市場で

は、ドイツやアメリカの製品に太刀打ちできないのである。
私は言った。
「はるみさんは、カストロという男をご存知ですか」
「ええ、ヒゲの男でしょう？　テレビのニュースで見たけれど、素敵な人ね」
「私がキューバへ行くのは、その素敵なヒゲの男のせいなんですよ」
彼女は眼をみはるようにして、私の方を眺めた。きざな言い方をしたものだ、と私は自分自身を責めながら、説明した。
この年、つまり一九五九年のはじめ、キューバの独裁政権だったバチスタ政府は、カストロのひきいる革命軍によって打倒された。一九三三年に政権をとったバチスタは、キューバ国内の進歩分子を弾圧し、公金横領、収賄、暗殺と暴虐のかぎりをつくしたから、それは当然の運命だった。バチスタにかわったカストロは、キューバの建てなおしにとりかかったが、かれの前によこたわっている障壁はキューバ経済に対するアメリカの圧力だった。カストロは、思い切った農地制度の改革を手はじめに、次々とアメリカ資本を国有化した。こうした革命政権の政策がアメリカの利益に反したことはいうまでもない。怒ったアメリカはキューバからの砂糖の買付けを中止し、また石油、自動車、その他農業機械などの主要物資の輸出も禁じて、カストロのキューバへ経済的制裁を加えはじめた。
農業国であるキューバは、トラクターやジープ、石油なしにはすまされない。石油はソ連から買ったが、ジープやトラクターは、比較的値段の安い、わが極東自動車から買付けたというしだ

いである。カストロが革命をおこさなければ、極東自動車がキューバへジープやトラクターを売ることもなかったし、私がキューバ駐在の社命を受けることもなかったろう。

こうした私の説明に、市川はるみが興味をもよおしたかどうかはわからなかった。適当に相槌をうちかえしてはいたが、おそらく、彼女には退屈だったに違いない。彼女の識っているキューバは、マンボとルンバの国であり、バナナ・ボートの故郷ということだろう。

「それじゃ」と彼女は言った。「キューバでカストロに会えるかもしれませんわね」

「会えるかもしれません。もしカストロに会えたら、記念にかれのヒゲをもらってきましょうか」

彼女は声を立てて笑ったが、私は笑わなかった。

私と市川はるみとは一つシートに肩を並べて坐っている。二人の間の距離は一尺と離れていない。私が右手をのばせば、彼女の肩を抱くこともできる。私の鼻孔には、彼女のつけている淡い香水の香りが伝わってくる。しかし、私と彼女とは、目もくらむような深い断層、おたがいに相手の存在を認め合っても声の通ずることのない分厚い透明な膜でさえぎられているのだ。

車は第一国道を左折して芝を通り抜け日比谷へ着いた。私は車を止めてもらい、外へ降り立った。

「どうもありがとう。ともかく、紀子のことをよろしく頼みます」

「かしこまりました」

「じゃ、さよなら」

「さようなら」
彼女の車はスタートした。私は反対の方向へ歩き出しながら、市川はるみの唇から、あした何時のご出発ですの？　という質問が発せられなかったことに、やはり、物足りなさをかんじていた。彼女は、三十八歳まで独身で過してきた私のことをどう思っているだろうか。
間もなく、私は、そうした浪漫的なもの思いを中絶しなければならなかった。極東自動車本社で私を待っていたものは、目の回るような忙しさだった。旅券や飛行機の予約をとってくれた航空代理店との最後の打ち合わせ、貿易部長との細部にわたる連絡事務手続きの再確認、社内各関係部課への挨拶回り、そしてあらゆる小さな、そして無視することのできない用事が私めがけて押しよせ、その渦の中に私を捲きこんだ。
疲れ果てた私が本社を出たのは、夕刻六時半ごろだった。
夏の夕暮れのものういような気配が街に溢れ、私の疲れをさらに煽り立てた。貿易部長は私を銀座へ誘ってくれたのだが、私はそれをことわっていた。私の体内に充ちている疲労は、アルコールでは癒やせそうにない気がしていたし、もっと正確にいうならば、私は独りになりたかったのだ。
私とても、当分離れなければならない日本の最後の夜を共にすごしてくれる女性をもたぬわけではない。だが、私はむしょうに孤独を愛したくなり、私の体臭のしみついたベッドの置いてある六帖のアパートが恋しくなっていた。
私は、ゆっくりゆっくり新橋まで歩き、駅でいつものように夕刊を買って、桜木町行の国電に

乗った。

車内はいつもと同じ程度に混雑し、いつもと同じように汗くさかった。そのくせ、私はいつもと違った新鮮な感情でそれらをうけとめ、吊り皮をもてあそんだ。

品川、大森と過ぎ、蒲田を通り越すと、電車は速度を増した。そのとき、私の乗った電車の横にベージュ色に塗った車体が併行して走った。特急の『はやぶさ』である。螢光灯の明かるい光を氾濫させた『はやぶさ』は、国電を徐々にではあるが確実に一台一台と抜きはじめた。

どんな場合でも、追い越されることに満足するものはいない。私も、『はやぶさ』に軽い敵意を感じながら、そちらを眺めた。

そのとき、私は見たのだ——一等車の中にビル・黒崎に非常によく似た男が坐っているのを。

私は、思わず息をとめ、眼玉がとび出すのではないかとおもうほど全身の力をこめて、追い抜いて進行する『はやぶさ』を瞶めた。次の瞬間、私の眼からは力が脱けた。その男が本当にビル・黒崎であるかどうかをたしかめる前に、黒崎らしい男の隣席の客が窓のブラインドを下してしまったのである。

私が黒崎を見たのは、いや、黒崎に酷似した男を見たのは、ごく短かい時間だった。そのような短かい時間で、併行する列車の乗客の人相をたしかめることができるものかどうか、と疑問を抱くものもいるかもしれないが、私にはそれが可能であると確言できる。『はやぶさ』の車両は、まばゆいほどの光に充ちていたし、飛行機乗りだった私の視力は、十数年たっても衰えてはいなかったのだから。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb